

## 近代文学における「南蛮趣味誕生」の「同時代」

畑中，佳恵  
日本学術振興会特別研究員

<https://doi.org/10.15017/8972>

---

出版情報：文献探究. 41, pp.1-23, 2003-03-31. 文献探究の会  
バージョン：  
権利関係：



# 近代文学における「南蛮趣味誕生」の「同時代」

畑中佳恵

## 一 はじめに

《われわれの間に「南蛮」に対する異国趣味の起つたのは又偶然の機会からです。明治四十年の夏、わたくしは医科大学の第一年を終つた時でしたが、其時与謝野寛先生を指南として、平野万里、吉井勇、北原白秋等新詩社の青年が九州旅行をしました。わたくしも之に加はりました。(※中略) わたくしは旅行に先つて、上野の図書館に通ひ、殊に天草騒動に関する数種の雑書を漁り、且つ抜書をして置きました。》<sup>\*1</sup>

近代文学における「南蛮趣味」誕生の場面を証言するものとしてよく引かれる、後年の木下柰太郎自身による述懐である。特にこの引用箇所は、野田宇太郎の『日本耽美派の誕生』(河出書房、昭和二六年一月)の冒頭を飾り、柰太郎の《進歩性とロマンチズム》(一九頁)、そして彼と北原白秋とを中心とした新詩社同人による、突然の、自発的な南蛮趣味の誕生を語るものとみなされた。

だが、その引用部分の少し前には、こんな箇所もみえる。

《わたくしに在つては、明治四十二年(?)に横浜で開かれた、横浜開港五十年祭の資料展覧会がこの方面に対する興味を誘ふ重要なものだったので。(※中略) かう云ふ展覧会は偶然開かれるわけのものではなく、学者、歴史家のうちには夙にかう云ふ方面への興味が高まつてゐたからなのでせう。(※中略) 残念ながら我々はそんな事は少しも知りませんでした。又史学の雑誌などへ出たさういふ関係の論文なども見て居りませんでした。それ故われわれの狭い仲間の間に起つた南蛮文学は全く自発的であつたのですが、然し其時代の学的雰囲気をいつか吸収してゐたのでせう。新聞とか演説とか何かで。》<sup>\*2</sup>

明治四二年の展覧会が明治四〇年の旅行に影響を与えたとは考えにくい。がゆえに、記憶の混乱した箇所として顧みられなかったのか。あるいはその、《全く自発的であつた》という言葉が重視され、やはり南蛮趣味誕生の偶発性を語っているに過ぎないとみなされたのか。《其時代の学的雰囲気》——少なくとも後年の当事者に気付かれていた「無意識」の存在——は、研究上、殆ど問題化されて来なかった。

管見の限りでは唯一、井出洋一郎の論考<sup>33</sup>が南蛮趣味を《時代の雰  
囲気に助長された》ものにとらえ、《明治初年から三〇年代末までの  
（※中略）キリシタン史学の歩みと、文芸・美術界の動勢を概観》し  
ようとすものだった。なかでも、李太郎の想起する横浜開港記念史  
料展覧会に注意が向けられ、今となつては史料を得がたいその内容が  
紹介されていることは、特筆に値する。

井出論については再度ふれることにして、野田論を筆頭とする先行  
研究に立ち戻り整理するなら、次のような特徴を指摘できる。すなわ  
ち、「南蛮趣味」をめぐる研究の多くが共有してきた、「先駆」と「正  
統」への関心である。

野田において殊更強調された、南蛮趣味誕生を導くロマンチックな  
第一人者としての李太郎像には、当時の状況に応答するコンテクスト  
を読みとるべきであろう。というのも、野田がいうように、当時《世  
間的には北原（※白秋）が明治四十二年に早くも処女詩集「邪宗門」  
を出版したために、太田（※正雄／木下李太郎）の名は割合に人に知ら  
れる面がすくなかつた》<sup>34</sup>のであり、人口に膾炙したその白秋像を揺  
るがすためには、衆目を集める強い言葉が選ばれたはずだからだ。

しかし例えば、李太郎が九州旅行のメンバーに加わったことで旅行  
の質が南蛮遺跡探訪と定まったかのごとき野田の記述は、客観的な事  
実をめぐるものとして後の研究に影響力をもつことになる<sup>35</sup>。これに  
対し重松泰雄から、白秋・李太郎の双方が、南蛮趣味の先駆者として  
榮譽を折半して担うべきであるとする論考も提出される<sup>36</sup>。が、裏を  
返せば、野田論の捕捉・修正を行うという意味で、重松論も「先駆」  
をめぐる問題領域を共有していたといえる。

「正統」をめぐる問いは、木下李太郎と、南蛮趣味の流行期に名を

残す芥川龍之介との比較が論じられる場面に、その一例をみることに  
できる。李太郎自身は、新村出ら《京都の南蛮学》の研究成果を参照  
しつつ創作活動し得た芥川と比して、自分たちを《無知な異国趣味》  
<sup>37</sup>と分析した。これに対し重松泰雄は、《芥川の利用した南蛮資料は、  
その殆どが間接的なものであり、（※中略）決して本格的な南蛮学の素  
養を背景としたものではなかつた》と論じる。《南蛮紅毛系雑書》を  
利用している初期の李太郎も芥川も、《キリシタンの原典資料》との  
関係が希薄であり、両者とも本格的でないとの見解が示された<sup>38</sup>。一  
方野田宇太郎は、芥川については《文献を小説の材料にしたにとどま  
り、自ら文献学を修める学究ではなかつた。従つて芥川のキリシタン  
文学とも南蛮文学とも云えない。》とし、李太郎については、後期の  
文献学的研究に基づいた創作を挙げ、《近代文学に於ける唯一のキリ  
シタン文学であり、南蛮文学》であるという賛辞を送っている<sup>39</sup>。  
このように、近代文学における南蛮趣味は、「誰が早いか」「誰が本  
格的か」という、きわめて文学史的な問いのもとで研究されてきた。  
当事者である李太郎自身による分析、そして《時代の雰囲気》を注視  
した井出論も、その例外ではない。後者についていえば、《大正期日  
本のメンタリテイが南蛮趣味の芸術を生み、はぐくんできた》という大き  
な史観が示される一方で、上田敏に「先駆」をみ、白秋を退けて李太  
郎に「正統」をみる、という（必ずしもその史観を支えはしないが、文学史  
的に穏健な）価値評価を時系列上に示している。論の前半に言及され  
た《時代の雰囲気》は、「先行するそれが南蛮趣味誕生に反映された」  
という一方向的な関係を確認するため取り出されたに過ぎない。

本稿が木下李太郎のいう《其時代の学的雰囲気》に注目する理由は、

「南蛮趣味」を対象とする研究の、問いのモードを変えるためだ。「先駆け」や「正統」をめぐる議論は、その（概念を前提する者の）定義に依存している、という意味で不毛である。それは、評価基準そのものを問いの対象としないことで、同語反復的な議論を成立させる。

前に挙げた「正統」をめぐる議論はそれでも、一次史料と関わっているか否か、という評価基準で概ね共通していた。が、例えば平井照敏<sup>10</sup>が磯貝雲峰「紫海の嵐」（明治二四年四月）を《日本最初の南蛮ものの小説》とし、藤沢古雪「史劇がらしや」（明治四〇年二月）とともに明治四〇年夏の九州旅行に先行するものとして挙げるとき、それらが一次史料と関わっていたか、などという問いは浮上しない。平井論は次のように展開されている。《この二人はまったく知られていない人々なので、李太郎と白秋は、南蛮ものの歴史の実質的最先端に位置するといつてよいことになる》。文学史そのものがその内実を問われないまま評価基準として適用されるとき、そしてその限りにおいて、「先駆」・「正統」としての李太郎・白秋の地位は保証されており、同時にそれ以外の基準の適用から遠ざけられているといえる。

誤解を避けるため言い添えておくなら、本稿は価値評価そのものを退けようとしているわけではない。例えば詩集『邪宗門』が、発表当初は冷眼視されながらも<sup>11</sup>、南蛮趣味という明治末から昭和初期に至る息長い現象の起点として今なお強い生命力を示している事実<sup>12</sup>を、単に無視してはならないだろう。『邪宗門』の流通に、「先駆け」「正統」を生産し固定化する文学史というカノンの後ろ盾があったことは勿論だが、その後ろ盾に値する何かがあればこそ、（文学史的にみても）現代的な作品たり得ていることを過小評価してはならない。さらに私の関心に触れていうなら、その（文学史からの要請を満たす）何かを裏切り得

る強度をも、所謂「南蛮趣味」の諸作品のなかに見いだせるのではないかと考えている。

つまり、ここで問うべきと考えるのは、現象としての「南蛮趣味の誕生」そして「流行」が、ある共同体のなかに果たした／果たしている機能である。そして、このように問うためにこそ、「南蛮趣味」の背景として退いている「同時代」に、改めて光をあてる必要があるのである。勿論、「同時代」の切り取り方も様々に可能であろう。本稿は、木下李太郎の言葉でいえば《其時代の学的雰囲気》を中心に、

（その学術的な言説と隣接して）一般レベルに流通する言説と関わるイメージを含め切り取ること、  
「南蛮趣味」諸作品の最も強度ある機能を記述することができると（現時点で）想定している。がそれは、南蛮趣味にとつて唯一の同時代である、と主張するものではない。

なお、本稿では、この同時代を分節・照射する試みを、次の問題に限定した範囲で行うことになる。すなわち、明治四〇年という分割線によって、それ以前とそれ以降の「南蛮」をめぐる風景は、どう違ってみえた／みえるのか。

このために最初に行う作業が、新詩社の九州旅行が行われた明治四〇年以前の、「広く南蛮と関わる言説」を収集・リストアップすることである。その資料としての選択基準は、「南蛮」という語が使用された言説であること、または、（現時点で）その辞書的な意味内容にあたる「ポルトガル、スペイン、イタリヤ、及びそれらの植民地であった南洋諸島、加えてそれらと密接な文物、特にキリスト教と関わる事物」をめぐる言説であること、あるいは現在からみれば「南蛮趣味」の言説と近接しつつも相違する言説（例えば「紅毛」として「南蛮」から区別されるも混用されがちなオランダに関する言説、「長崎」のセールスポイント

としての紙はた薦をめぐる言説、キリシタンとしてでない「細川ガラシャ」を語る言説であること。言説のジャンルにはこだわらず、むしろ、多様なジャンルから資料を得ようとするものである。

リストの体裁は、上段に「学術系雑誌にみえる関連記事」を、中段に、より一般的な言説としての「その他雑誌、新聞にみえる関連記事」を配し、下段に単行本と関連事項を収めた。井出論との関わりでいえば、その導入部分で概観されている『在留外人による研究』及び『我園キリシタン研究』について、具体例にまで遡ってリスト化したのが本稿リスト上段の内容であるといっている。

ここで、なぜ、既にその存在（の概要）が知られている資料を含め、あえて個別事例に遡る必要があるのか、と疑問に思われるかもしれない。それには、こう答えよう。南蛮趣味の機能を評価すべく、南蛮趣味と同時代との相互関係（運動のベクトルだけでなく、乖離のベクトルも含めた関係性）を捉えるためには、広い意味での学術的言説と、より一般的なレベルで流布する言説とが交通する具体性のレベルにおいて新たに、同時代を立ち上げることが不可欠だからだ、と。

最後に、本稿における明治一〇年代以降という同時代の括り方が最適であるか否かについては、当然、それ以前（江戸時代／明治初期）の言説との比較検証が不可欠であろう。が、明らかに本稿の手に余る。明治四〇年以降の「流行」をめぐる調査と同様、別稿に譲ることにしたい。以降では、幾つかの視点を設けて、本稿の想定する「南蛮趣味誕生の同時代」を記述し、そのなかに『明星』新詩社同人による旅行、及びその紀行文「五足の靴」を配置しようとする。

## 二 長崎という土地

最初に整理しておきたいのは、『明星』新詩社同人が訪れることになる明治四〇年の「長崎」が、いったいどのような土地であったか、ということだ。<sup>\*3</sup> まずは、日本の中心・東京から発信される一般レベルの言説として、『風俗画報』を参照してみよう。例えば明治二二年に、幕府の年中行事として『切支丹宗門改』が図入りで紹介されているが、この江戸における幕臣の届出の風景（二枚の紙に連印する様子）は、長崎とも踏み絵とも関わらない。二七年に紹介された、転びバテレン「岡本三右衛門の墓」もやはり、東京に残る遺跡である。

『風俗画報』誌上で長崎の紹介に関わる話題は、「紙薦はた」についてが主であった。三四年八月に「郵船図会」を特集するため、編集者が汽船春日丸に乗船し、長崎を訪れたが、同地の事物をめぐる収穫としては、崇福寺や石畳に関する記事がわずかに掲載されただけである。

また例えば、各地の方言を収集・紹介する記事から、長崎のイメージを探ることもできるだろう。『風俗画報』明治二九年十一月号にみえる記事「長崎方言」（長崎の寄稿者による）には、『外国の言語の転訛して方言の如くなれるもありて今一々之を挙げむには読者の倦厭を来すべければ純粹の長崎方言と認るものゝみを掲げて画報の余白を汚すこととはなしぬ』と断り書きされている。長崎に土着する外来語（勿論そこには、潜在的に南蛮の要素も含まれるだろう）を『純粹の長崎方言』から切り離して（さらに）卑下し、排除する姿勢が露わにされているのである。

長崎方言は、長崎で発信・受信される言説においても同様に、汚いもの、矯正すべきものとして語られていた。明治三五年一月に創刊された『東洋日の出新聞』<sup>\*14</sup>には、『土語方言の勢力は封建時代と大差無きこと實際なり』<sup>\*15</sup>という批判がみえる。同紙では、長崎人の気質一

般を「支那臭い」という形容で批判する言説がパターン化しており、長崎方言の要素としての南蛮は、「支那」のなかに渾然として分節化されないまま、負のイメージの範疇にあつたといえそうだ。

続けて『東洋日の出新聞』紙上を迫うことで、(明治三五年以降の)長崎における長崎観の一端を垣間みることにしよう。同誌の論調は基本的に、『長崎が自ら長崎を世に紹介するの意無き』ことを惜しみ、また憤るものとなっている<sup>16</sup>。打開策として主張されたのは、主な来客である外国人が長崎滞在中に、(整備された)自然を消費するための大公園建設であり、また長崎市を圍繞する寺院・墓地の丘山一面に桜花を植えようという、「桜の港」というイメージ作りであつた。特に後者の主張はキャンペーンといつていいほど紙上を飾り、多くの賛成投書も寄せられたらしい。(※リストの明治三五年八月頃を参照のこと)。

記事「桜の港たらしめよ」<sup>17</sup>には、この「桜の港」キャンペーンに関して、『支那風の仏閣。或は南蛮キリシタンの遺跡等』が長崎に『固有の宝』であることに言及する箇所がみえる。注目すべきは、その宝を『土地の人は見慣るゝ儘に却て左程にも珍重せず』持ち腐らせており、これを外客にアピールしようとすれば、まずは桜の花で化粧する必要がある、との認識が伺えることであろう。

それに加えて、例えばキリシタン弾圧の歴史で有名な浦上山里村も、同紙上では模範的な愛国心を示す村として報じられているし(※リストの明治三九年を参照のこと)、後には「南蛮伝来」という冠詞が固定するのであるうカステラについても、『南洋人の直伝』と広告されているのが目にとまる<sup>18</sup>。

以上、『風俗画報』及び『東洋日の出新聞』にみえる言説を検討してきた。ここから、明治四〇年以前の長崎について、次のようなイメ

ージが浮かび上がったと思う。すなわち、この時代において長崎の地方色は模索されている最中であり、そのセールスポイントは、南蛮趣味の要素と全くといっていいほど結びついていなかった。また南蛮に関する語彙は、特にそれと名指されなまま蔑視・排除の対象に含まれ、遺跡はといえば、長崎の日常性のなかに埋もれた状態である。

『明星』新詩社同人が興味を寄せ訪れた長崎は、一般的なレベルで眺めればひとまず、このような平凡な場所であつたといえる。——とはいえ、長崎を関心の的とし、南蛮関係の事物・資料を入手しようとしたのが、彼らばかりでなかったことは確かだ。次章では、特に学術的な関心を南蛮・長崎に寄せる同時代の動きを追うことにしよう。

### 三 長崎、及び南蛮関係の事物に対する学術的な関心

長崎、及び南蛮と関わる事物に明治一〇年代から早くも注目し、研究対象としてきたのが、『TRANSACTIONS OF THE ASIATIC SOCIETY OF JAPAN』誌(※以降『TASJ』と略記し、論文名は訳す)に寄稿したような、(主に)欧米人たちである。外交官、宣教師、日本政府に雇われた公務員、軍人、各種専門家、ビジネスマンといった面々によつて横浜に日本アジア協会が設立されたのは、明治五年。その二年後から発行された英語の機関誌『TASJ』は、会員の幅広さを物語る様々な論考——日本の歴史・地理・風俗・文学・言語・植物・気象など多岐に渡る——を掲載した。その多くは、自国を検証するためにこそ、日本という他者を欲するものだったようにみえる。なかでも、異文化接触の地としての長崎の歴史を明らかにすることは、両者の関係を描き出すと同時に両者の輪郭を際立たせるだろう。とすれば、同誌に多くの

長崎・南蛮関係の論考が寄せられたことはうなずける。

その最も早い時期に発表された箕作嘉吉の「日本に於ける蘭学の始め」(明治一〇年二月)は、同誌上では珍しい日本人による対外関係の(英文)論考であり、一見異質にみえるかもしれない。だが、日本で名を成した人々がみな、蘭学を学ぶことで医学・法律・貿易上の知識を得る素地を築いた、という論旨において、そのような自国の歴史に対する誇りを表明した箕作は、他の欧米の論者たちと同じ構図を有しているといえる。ここで、キリシタン研究に名高い英国人アーネスト・サトウの主張を例にとつてみよう。

サトウは「山口の教会の盛衰 一五五〇〜一五八六年」(明治一一年一月)において、日本の歴史の中でヨーロッパ人の関心を最も引くのは、ポルトガル人が日本に来港し追放されるまでの、一五四二年から一六四〇年であると述べる。彼曰く、日本でのイエズス会による布教失敗の原因を明らかにすることは、プロテスタントによる布教の可能性、ひいては日本の先達としてのイギリス像を描出することにつながるからだ。イギリス人であるサトウにおいて、ポルトガル・スペイン／オランダ・イギリスという反目しあつた双方の史料からは得られない「公平さ」が日本側の史料にはある、とされているのも見逃せない。つまりは、誇らしい自国像を可能にしてくれる(限りでの)他国像を、自他が接触した場所から導出しようとする姿勢であり、これは前に述べた箕作にもあてはまる。それは、キリシタン南蛮・対外交渉をめぐる研究の、少なくとも初期の段階を支配する姿勢だったようだ。さて、本稿末尾のリストを見ていただくとわかるように、キリシタン南蛮関係の研究は、主に明治一〇年代と二〇年代初頭の『TASJ』誌上を大いに賑わした。(なお、リストからはみ出る最初の三年間に、該当す

る論考はみえない。)明治二二年一二月、文科大学史学会の機関『史学会雑誌』が創刊したとき、キリシタン南蛮・対外関係史はすでに、研究領域としてかなり整備されていたといふべきだろう。

そもそも史学会の設立には、『TASJ』会員でもあるドイツ人御雇教師リースの提言があつたらしく、設立当初からその姿勢を共有していたことは疑い得ない。『史学会雑誌』の第一号冒頭には、『今此会ヲ開クハ、従来史局ニ於テ採集セシ材料ニ抛リ、西洋歴史攷究ノ法ヲ参照シテ、我が歴史ノ事蹟ヲ考証シ、或ハ之ヲ編成シテ、国家ヲ裨益セント欲スルナリ』という開会演述が掲げられており、日本自身の手になる自画像を、『TASJ』の体現する欧米の眼差しを受け継ぐかたちで描出する、という意図を端的に語っている。

『史学会雑誌』は、『TASJ』誌上に研究成果として掲載された資料を邦訳・転載するといったかたちでも、その関わりの深さを示しながら、第一号からキリシタン南蛮・対外交渉史をめぐる研究成果を多く発信している。岡田正之、磯田良、山縣昌蔵、坪井九馬三ほか、ここに挙げきれない程の研究者と論考が関わっていたことを、リストに一瞥していただきたい。そのなかには、イルマン(宗徒、インヘルノ(地獄)、ハライズ(天堂)といった「南蛮」関係の語彙を、まとめて紹介することに紙幅を割いた論考もみえる<sup>20)</sup>。また、明治二八年六月から八月にかけて、斎藤阿具による長崎県への貿易資料収集が行われ、同誌上に報告されたのも見逃せない出来事であろう。こうして明治三九年の春、上野の東京帝室博物館で開かれた、第五回特別展「嘉永以前西洋輸入品及参考品」において、『天主教祈禱文』、『耶穌誕生図』、『白磁観音立像』、『踏絵』<sup>21)</sup>など南蛮関係の遺物が一般に供されたことは、史学分野の研究成果の一つの結実であつた。

以上、木下李太郎が《其時代の学的雰囲気》として仄めかした史学周辺の状況について述べてきた。駆け足で通り抜けた観があるが、明治四〇年以降を問題とする際に、より詳細な研究テーマの分布等をめぐり、再び取り上げる機会があるだろう。

#### 四 「南蛮」という語の用例

東大系史学の研究成果が続々と公になるにつれ、主に古文書に埋もれていた南蛮関係の語彙・情報が、流通し始めるようになる。この同時代を背景とした明治四〇年以前の一般誌・紙上に、南蛮関係の語彙を用いた文章が登場し始めることは、特に不思議なことではない。

この章は、一般レベルに流布する言説にみえる南蛮関係の語彙を、具体的に取り上げるために設けた。が、紙幅の都合上、そのものずばり「南蛮」という語に限って用例を検討することにした。先に簡単にまとめておくと、明治四〇年以前において、「南蛮」という語にはその一般的な使用法・イメージにブレが伺えるが、四〇年以降には（ある意味で）統一される、ということを確認することになる。

まず最初に、「南蛮鉄」というあだ名のニュアンスが小説に活かされている例を取り上げよう。欠伸居士の『南蛮鉄』（明治二七年三月）、蒲原有明の『南蛮鉄』（明治三一年五月）はともに、その題名である「南蛮鉄」をあだ名にもつ登場人物をめぐる物語が展開する。強情で頑固という意味の「堅さ」、律儀で勤勉すぎるといふ「堅さ」が、それぞれ舶来の鉄の「硬さ」と掛けられている。こういった用法は、明治四三年に発表された佐野天声「切支丹ころび」『早稲田文学』一月以降は管見に入らず、現在にも馴染みの薄いものであることから、南蛮

趣味流行とともに廃れていったことが想像される。

明治三六年八月の『中央公論』誌上には、南蛮趣味の流行以降は全く姿を消した用例もみえる。すなわち、外国一般を指す語としての「南蛮」である。記事自体は、地球の自転やテムズ川の工事費など、数字に関する様々な雑学を提供するものだが、イタリヤ・アメリカ・スコットランド・イギリス・オーストラリア・ニュージールランド・ロシア・インド・ブラジル・ノルウェー・スペインといった世界各国の話題が、「南蛮叢話」という題名で統括されていた。

さて、「南蛮叢話」と同じ号の『中央公論』には、上原清影の「南遊雑詩」という漢詩の連作が掲載されている。この詩では、（実際の出来事か否かは別として）ニューギニアから帰国する感慨がうたわれており、『久為孤客在南蛮』という句の中に、ニューギニアを南蛮と表現しているのがみえる。

これ以前、ニューギニアが『中央公論』誌上に取り上げられる場面があった。未開の地に住んでいる「南洋の食人種」を紹介する記事である（※白龍江「南洋の食人種」明治三二年四月、伊能嘉矩「南洋探検談」明治三二年一月）。これは、当時の『東京人類学雑誌』を彩る話題であった。明治三二年九月に刊行された同誌上には、同じく伊能嘉矩が『龍江義信氏の談話』として「南ニューギニイ土人の土俗」を報告しているのがみえる。

人類学という分野の学術的な言説が、最も目に見えやすい形で自他の線引きを行うものであったことは言うまでもない。その最も顕著な例を、明治三五年三月から七月にかけて大坂で開催された、第五回内国勸業博覧会にみることでできよう。他でもない「学術人類館」である。東京帝国大学の人類学者坪井正五郎の手になるこのパビリオンは、



次のような趣意で計画された。《文明各国の博覧会を観察するに人類館の設備あらざるはなし之至当の事と信す》（※中略）内地に最近の異人種即ち北海道アイヌ、台湾の生蕃、琉球、朝鮮、支那、印度、爪哇、等の七種の土人を傭聘し其の最も固有なる生息の階級、程度、人情、風俗、等を示すことを目的とし各国の異なる住居所の模型、装束、器具、動作、遊技、人類、等を観覽せしむる所以なり》<sup>\*22</sup>

このわずかばかりの文章からも、《文明各国》に遅れてその眼差しを手に入れようとする意図が伝わってくるだろう。日本の人類学は、明治二八年に日清戦争の結果として新たに領土に組み込まれた台湾など、膨張する自国に近接する「未開」を次々と研究対象に加えていった。研究対象とするということは、すなわち自他の間に境界線を引くことであり、その所作を通して自己は「先進」側に位置づけられたのである。「南遊雑詩」の用例から導かれることは、「南蛮」という語が、この自国民の創出と深く関わる言説上にもあらわれていたということだ。

一方、明治四〇年七月から八月にかけて九州を旅行した、『明星』新詩社同人による紀行文「五足の靴」にも、「南蛮」の用例が一件見出せる。《昔を忘れ果てたやうな有馬城趾》を訪れた際、島原の乱を率いる前の、天草四郎の心情を想像した文章の一部である。《長崎、平戸の辺から駿々と外国文明が入つて来て、帰来せる漂流者の話、美はしき南蛮国の磁器などは或は此少年の多感なる耳目に詩的憧憬を喚起したかも知れない。女は伽羅の油に髪を結といふ天竺、はた碧眼の美丈夫が自纏巾に似たる衣を着るといふ、入船出船の阿蘭陀の都此世の幸を求めに行こうか。》<sup>\*23</sup>

この、少年の心を惹き付ける《南蛮国》は、『外国文明』のうちに

数えられ、かつ《阿蘭陀》と並べられていることから、ポルトガル・スペイン（※イタリアはその支配下）を彷彿とさせる用例である。ここで別稿に譲るべき範囲に踏み込むなら、旅行後の明治四〇年一月に北原白秋が『明星』に寄せた短歌、《板榔投げむしらしら權よせて鸚哥ら歌へ南蛮の船》に、南蛮趣味誕生期の創作に用いられた「南蛮」の語が、南洋諸島を彷彿とさせる典型例をみることが出来る。熱帯地方原産のインコは勿論、板榔子の実を噛むという慣習も一般に「南」のものともなされていた。《マレー諸島シヤム等に行はれるが、人類館に居る印度人も男女共に之を噛むの風がある》との報告<sup>\*24</sup>に端的なように、それは、当時の「先進」から見れば「未開」の徴でもあった。

以上から、次のような展望が得られるだろう。明治四〇年以前の「外国一般」あるいは「南蛮鉄の硬さ」と関わるようなイメージの振幅は、以後の南蛮趣味において「ポルトガル・スペイン・イタリアとその植民地であった南洋の地域」という幅へと淘汰されることが予想される。この「南蛮」一語と対応して立ち上がるイメージの幅の中に、当時、主に人類学を通して関心が寄せられていた、ニューギニアに代表される南の野蛮な地への志向と、それを支配する側である西洋・近代への志向が同居していることは、とても興味深いことではないだろうか。つまり、北原白秋らがキーワードとしたのは、「未開／先進の二項対立のいずれか」という形での所属が不明瞭な「南蛮」であった、とさえそうである。とすれば、この人類学的な言説と近接しつつ、あるズレを示す場所で（他の用法を淘汰するような）力をもった「南蛮」というキーワードが、その語彙の広がりを通して、具体的にどうズレ、全体的にどう機能したのか。このような問題意識において、南蛮趣味の初期にあたる諸作品について分析を行う必要性がみえてくる。

## 五 「五足の靴」の射程——課題に触れつつ、まとめにかえて

前章で南蛮趣味の語彙がもつ可能性にふれたが、最後に、「五足の靴」の旅において、南蛮関係の語彙を収集しようとする意図がかなり明確に示されていることを確認しておくべきだろう。「五足の靴（九平戸）」<sup>\*25</sup>には、「今日町を歩き乍ら、出来る丈外国語の日本化したのを採さうとしたが、余り集まらなかつた。昔は長崎に多かつたらうが、文明の伝播の早い今日は、却つて比較的に不便な此地あたりに最も多く残つてゐるらしい。ポーウラ（南瓜）<sup>かぼちゃ</sup> コノブエ（蜘蛛の巣） トツチンギヨウ（木の梢）の如きは其の二三の例だ。」とある。

ここで、彼らが生きた言葉として、実際に長崎周辺で使われている方言を入手しようとしていたことと、同時代の言説との関わりを整理しておく。長崎方言の学術的収集については、明治二年前後の『人類学雑誌』に、わずかだが確認できる。組織的に行われた国内各地の方言の収集は、その鏡像としての国語の創出（方言との間に行う線引きによって国語の輪郭が描き出される）と直接関わることで、やはり自国民の創出を志向するものであつただろう。「五足の靴」の旅の姿勢が、この同時代の動きに連動する側面をもつていたことは否定できない。

方言一般は、学術的には国語の周縁を形成する限りにおいて価値づけられたはずであり、また第二章で述べたように、特に外来の要素をもつ長崎の土着語は、一般に汚いもの、矯正すべきものとみなされていた。例えば二五年の『女学雑誌』に掲載された長崎のキリシタン史跡探訪記<sup>\*26</sup>が、隠れキリシタンの祈禱の言葉について、「音を間違つたものだ」と紹介しているのも、これにあたる。「五足の靴」の旅で外来の土着語の収集が望まれたのは、創作と関わる美的価値がそこに認

められたからに他ならないだろう。だが、それがもし、国語と方言に割り当てられた美／醜の二項対立を単に反転させただけならば、同時代の枠組みに依拠した所作に過ぎない、ということになる……。

さて、結局彼らは、生きた言葉としての外来の土着語・長崎方言を思つたように収集することができなかった。現地の老人や公務員に尋ねても、茫然とするばかりで何の助けにもならなかつたという<sup>\*27</sup>。第二章で確認したように、彼らの訪れた長崎が、近代化の遅れを取り戻すべく、画一化された地方都市像をめざして、——方言を矯正し、公園を作り、石塔や墓や南蛮史跡は桜の花に埋めようと——ひた走つていたことが、ここに重なつてくるだろう。

九州旅行を終え、彼らは再び東京という日本の中心に身をおいて、（奈太郎が旅行前に行ったというような）書物に埋もれた語彙の収集、そしてその語彙を創作に生かすことへと没頭する。史学者たちがやはり、同様の手つきで南蛮の語彙を掘り起こし、流通させる傍らで……。

明治四〇年以降の彼らの創作活動は、自他の線引きと関わる同時代の規範を、どのように逸脱し得ていたのだろうか。はたまた、単に国語／方言の図式の中で戯れたに過ぎないのか。この問いに、「未開／先進」の二項対立をズラす可能性を秘めた南蛮の語彙、という観点から接近すること。さらには、本稿では触れることのできなかつた「先行作品」との、類似のみならず差異を分節化することも含め、白秋や奈太郎の各作品が示し得る機能とその強度を浮き彫りにすること。そして勿論、その前提となる作業として、本稿で試みたリストアップの作業を、まずは流行期の言説にまで延長すること。これら次稿に向けての課題を確認したところで、ひとまず擱筆することにした。

注

- 1 木下李太郎「明治末年の南蛮文学」(『国文学 解釈と鑑賞』昭和二十七年五月)／『木下李太郎全集 第七卷』岩波書店、三二七頁)
- 2 前掲「明治末年の南蛮文学」(三一六頁)
- 3 井出洋一郎「明治末年から昭和初期の文芸・美術にみる南蛮趣味に就て」(『山梨県立美術館研究紀要2』昭和五十六年三月、一九頁)
- 4 野田宇太郎「日本耽美派の誕生」(河出書房、昭和二十六年一月、一八頁)
- 5 例えば楠道隆「作品の成立とその評価——白秋「邪宗門」の考察——」(『神戸大学教養部 研究収録3』昭和二十六年一〇月、二二頁)は『日本耽美派の誕生』から引いて、《南蛮遺跡探訪はすべて木下李太郎の発案である事がわか》るとした。
- 6 重松泰雄「邪宗門」の南蛮詩と李太郎」(『語文研究』昭和三十一年一〇月)
- 7 前掲「明治末年の南蛮文学」(三二二頁)
- 8 重松泰雄「李太郎・龍之介の南蛮趣味について」(『文学論輯』昭和三十一年一月、三五頁)
- 9 野田宇太郎「木下李太郎とキリシタン文学」(『国文学 解釈と鑑賞』昭和四十二年六月、二二三頁)
- 10 平井照敏「近代南蛮文学の出發——木下李太郎の位置——」(『青山学院女子短大・綜合文化研究所年報』平成五年七月、六五頁)。なお本稿リストでは、「紫海の嵐」の作者名を(初出の筆名である)「みさを」、藤沢古雪の著作名を『がらしあ』としている。
- 11 『邪宗門』が発表当初、殆ど無視されたことは、白秋自身「邪宗門物語」(『白秋全集月報』12号、昭和五年九月)のなかで回想している。
- 12 例えば辻邦男は「長崎天草の旅」(『日本の旅 第一四卷』小学館、昭和四五
- 13 年七月)のなかで、一般的に長崎といえは真つ先に『邪宗門』を思い浮かべる傾向があることに触れている。
- 14 これについては、拙論「長崎」のイメージとしての「南蛮趣味」序論(上)『敍説II02』平成二三年八月)にも別の側面から述べている。
- 15 『明治維新以後の長崎』(長崎市小学校職員会、大正一四年一月、五六六頁)は、『東洋日の出新聞』を《中世なる民論を代表し政党政派に偏せざるを以て其主義とし記事報道一種の色彩を帯へり》と評している。これをもって同紙の性格とするには問題があるうが、少なくとも長崎の《民論》の一端を担っていたとみることに不都合はないと思われる。
- 16 「別天地の自覚」(『東洋日の出新聞』明治三十九年七月)
- 17 「京都と長崎」(『東洋日の出新聞』明治三十五年三月二日)
- 18 「桜の港たらしめよ」(『東洋日の出新聞』明治三十五年八月一六日)
- 19 白水喜八「名譽カステーラ広告」(『東洋日の出新聞』明治四〇年一月一日)
- 20 重野安禪「史学ニ従事スル者ハ其心至公至平ナラザルベカラズ」(『史学会雑誌』明治三十二年二月)
- 21 例えば、坪井九馬三「古書古文書に見ゆる耶蘇教関係の言語」(明治二八年一月)、同「長崎市西勝寺文書に見ゆる外国語解説」(三二年五月)、同「羅馬府ばるべりに図書館所蔵日本古文書」(三三年一〇月)ほか。
- 22 『嘉永以前西洋輸入品及参考品目録』(東京帝室博物館、明治三十九年一〇月)
- 23 「人類館開設趣意書」(『東京人類学会雑誌』明治三六年二月、二〇九頁)
- 24 「五足の靴(十五) 有馬城趾」(『東京二六新聞』明治四〇年八月二四日)
- 25 松村瞭「大坂の人類館」(『東京人類学雑誌』明治三六年四月、二九一頁)
- 26 「五足の靴(九) 平戸」(『東京二六新聞』明治四〇年八月一六日)
- 27 「迎春行」(五十五 崎陽の小考古)『女学雑誌』明治二五年八月)
- 28 「五足の靴(十三) 大江村」(『東京二六新聞』明治四〇年八月二二日)

【表】 明治一〇年代以降四〇年九月までの、「長崎」及び「南蛮」に関する言説（初稿）

年月（明治）	学術系雑誌にみえる関連記事	その他雑誌・新聞にみえる関連記事	単行本及び周辺の出来事
一〇年 二月	K. Misakuri 「The Early Study of Dutch in Japan」『TRANSACCIONS OF THE ASIATIC SOCIETY OF JAPAN』（※誌名は以降『TASJ』と略記、発表年月は各論に付されたものを採用、なお論文名を括弧内に訳す、真作准吉「日本に於ける蘭学の始末」）		
三月			長崎博覧会（一五日から一〇〇日回、於諏訪公園）
一〇月	John H. Gubbins 「Review of the Introduction of Christianity into China and Japan」『TASJ』（※「日本に中国へのキリスト教伝来がいつからか」） Ernest M. Satow 「The causes which led to the downfall of the Christian Mission in Japan」『TASJ』（※「日本でのキリスト教伝道が衰退した原因」） [REPORT OF COMMITTEE] 蘭学部 Ernest M. Satow 「The Introduction of Tobacco into Japan」『TASJ』（※「日本への煙草の伝来」）		
一一年 十一月	Ernest M. Satow 「Vicissitudes of the Church at Yamaguchi from 1550 to 1586」『TASJ』（※「山口の教会の盛衰 一五五〇～一五八六年」）		
一二年 一月	H. Stout 「Inscriptions in Shimabara and Amakusa」『TASJ』（※「島原（天草）の碑文」）		
一三年 一月	W. A. Woolley 「Historical Notes on Nagasaki」『TASJ』（※「長崎の歴史（ヒストリー）」）		
一四年 ？月			E. M. Satow, A. G. S. Hawes 『A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan』（Kelly & Co. Yokohama ※ガイドブック、ルーペで長崎あり）
三月	W. B. Wright 「The Capture and Captivity of Pare Giovanni Batista Sidotti in Japan from 1709 to 1715」『TASJ』（※「日本でのペレ・ジヨヴァン・バスタスタ・シドッチの逮捕監禁 一七〇九～一七一五年」） 新井白石「西洋紀聞」の英訳		
一五年 十二月	Geerts 「The Arima Rebellion and the Conduct of Koeckbecker」『TASJ』（※「奇蹟の反乱ヤマトヤマトヤマトヤマトの態度」）		

一六年 ?月	五月	J.M.Dixon 「Voyage of the Dutch Ship "Grol" from Hirado to Tonking」『TASJ』(※「平戸から東京へオランダ船GROLの航海」)		三山汽船部肥後汽船会社が長崎港を中心とした海航路を開く。長崎県から佐賀県が分離再置(九年の府県統合)西区域は統合された。
一七年 ?月	五月	E.M.Satow 「Notes on the Intercourse between Japan and Stam in the Seventeenth Century」『TASJ』(※「十七世紀日本とオランダの交通」)		E.M.Satow, A.G.S.Hawes 『A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan』(London ※改訂第二版) 大阪商船会社長崎支店の開業
一八年 九月	五月			日本郵船会社長崎支店の開業
一九年 一〇月				長崎区長、長崎港に因する旧記図書類の収集保管を企画(二十二年六月、書籍一八二部・図書二六種と区庁に保存)
二〇年 ?月	一月		伊藤半二郎「じゃがたら文」『女学雑誌』	中島川の変流工事(長崎港第一次港湾改修工事、一〇年)で出島の形状が変わる
	二月		伊藤半二郎「じゃがたら文(前号のつづき)」 『女学雑誌』(※同月二二日号に「じゃがたら文(前号のつづき)」、一九日号に「じゃがたら文(補二)」 ※筆名なし「佳伝」細川忠興の妻「『女学雑誌』(※ただし、キリシタン関連の記述なし)」	
	三月	山中笑「婚姻風俗集〇私通者より贈り者」『東京人類学会報告』(※天草の風俗)		Pierre Loti 『Madame Chrysanthème』(※『フイガロ』誌に発表し始めたが中断、二六年にカルマン・レヴィから出版、『お菊さん』)
二一年 ?月	二月			E.M.Satow 『The Jesuit Mission press in Japan, 1591-1610』

六月	J.M.Dixon 「Christian Valley」 『TASJ』 ※「キリスト教徒の谷」		(London, privately printed)
八月	菊地吉祥 「彦岐国風俗及方言」 『東京人類学会雑誌』		長崎電灯会社設立
十二月	B.H.Chamberlain 「A Review of Mr.Satow's Monograph on "The Jesuit Mission Press in Japan 1591-1610"」 『TASJ』 ※「サトウ氏の『日本耶穌会刊行書誌』(一五九一—一六一〇)書評」 羽柴雄輔 「各地方言表」 『東京人類学会雑誌』 ※長崎は「ボンブ」(フ／唐座子)のみ		大日本帝國憲法発布 (明治元年五榜の掲示に示されたキリスト教嚴禁は、六年三月の切支丹禁制高札廃止後も続いたが、ここにおいて信教の自由が認められた)
二月	蘭地吉祥 「彦岐国風俗後報」 『東京人類学会雑誌』 古見安六 「方言研究ノ材料 肥前国長崎」 『東京人類学会雑誌』		長崎市制実施 (市の人口は約五四五〇〇人)
四月		半顔居士 「長崎の紙鳶会」 『風俗画報』 (※長崎の紙鳶について、同誌は以降第六、二八、一〇六、二〇六号で紹介)	
六月	A.F.King 「A Gravestone in Batavia to the Memory of a Japanese Christian of the Seventeenth Century」 『TASJ』 ※「十七世紀日本キリスト教徒の記憶」(「シバタマツの墓石」)	※筆名なし「幕府年中行事十月 切支丹宗門改の事」 『風俗画報』 (※幕臣の届出で、踏絵ではない、噺飾繪による図あり)	
十一月	白井光太郎 「雜報○下野足利ノ劍」 『東京人類学会雑誌』 (※「南蛮国初来の作」の劍といふ)		博多〜久留米の鉄道開通
十二月	岡田正之 「伊達政宗西班牙王に贈りし書」 『史学会雑誌』		鈴木力「新々長崎土産 増補再版」 (著作兼発行)
二月			
三月	E.M.Satow 「The Origin of Spanish and Portuguese Rivalry in Japan」 『TASJ』 (※「日本に於けるスペイン人とポルトガル人の競争の起源」)	※筆名なし「書評・新々長崎みやげ」 『国民之友』 ※筆名なし「書評・新々長崎みやげ」 『女学雑誌』	
四月	岡田正之 「徳川幕府吉利支丹宗門改考」 『史学会雑誌』		府県制・郡制 (佐賀県を除く旧肥前国がすべて長崎県に編入)
五月	岡田正之 「契利斯督記考」 『史学会雑誌』		



三月	漢訳本の解題 山縣昌藏「和蘭通商館庄の書翰(第廿二号の続)」『史学会雑誌』 坪井九馬三「まるこ、ぼおる」見聞録一名東洋紀行 中本一冊『史学会雑誌』(※解題) 坪井九馬三「鉄砲伝来考 明治五年二月十三日講演」『史学会雑誌』		
四月	坪井九馬三「鉄砲伝来考(承前) 明治五年二月十三日講演」『史学会雑誌』	※筆名なし「迎春行」(五十五 崎陽の小考古) 『女学雑誌』(※雑誌巻頭に「長崎地方の迎春行に天主教徒の跡を尋ねし」とある)	
五月	坪井九馬三「鉄砲伝来考(承前) 明治五年二月十三日講演」『史学会雑誌』		
六月	坪井九馬三「鉄砲伝来考(承前) 明治五年二月十三日講演」『史学会雑誌』		
九月	坪井九馬三「びんと」東洋紀行考『史学会雑誌』(※独訳本の解題)		
二月	岡田正之「三百年前の羅馬字印」『史学雑誌』	雪山外史「史伝／切支丹宗迫害の理由」『女学雑誌』	
二六年 六月	本多辰治郎「三浦安針の書翰」『史学雑誌』		大和田健樹「通俗文学全書第六編 紀行文選」(博文館、※明和二年の長赤水による長崎紀行記を所収)
七月	本多辰治郎「三浦安針の書翰(承前)」『史学雑誌』		幸田露伴「枕頭山水」(博文館、※そのうち「まき筆日記」に二三年五月の長崎を記録)
九月	本多辰治郎「三浦安針の書翰(承前)」『史学雑誌』		長崎工作分局が三菱合資会社に所属、三菱造船所と改称
一〇月	箕作元八「十七世紀に於ける英蘭二国合同策に就て」『史学雑誌』(※ただし、日本との関係は確少)	石橋思案「長崎の新年」『風俗画報』	次伸居士「南蛮鉄」(金川書店)
十一月	箕作元八「十七世紀に於ける英蘭二国合同策に就て(承前)」『史学雑誌』	笹の家「切支丹牢獄並岡本三右衛門の墓」(前々号の続)『風俗画報』	遅塚麗水「小説百家選第二巻 南蛮大王」(春陽堂)
二月	箕作元八「十七世紀に於ける英蘭二国合同策に就て(承前)」『史学雑誌』		
二七年 三月			
四月			
五月	坪井九馬三「天主なる名称の出処に就て 二七年二月十日講演」『史学雑誌』		
六月	坪井九馬三「和蘭東印度会社使節支那紀行」『史学雑誌』(※ただし、日本との関係は確少)		
七月	本多辰治郎「和蘭通商の起源及其創立考」『史学雑誌』		日清戦争開戦



八月	本多淺治郎「和蘭通商の起源及其創立考(承前)」「史学雜誌」 箕作元八「ルスナの地の所在及支倉六右衛門外航通路」『史学雜誌』(※答問欄の答、題は内容より)		
九月	瀧川龜太郎「和蘭バタビア知事アントニオより徳川幕府に上りし書簡」『史学雜誌』		
十一月	瀧川龜太郎「和蘭バタビア知事アントニオより徳川幕府に上りし書簡(承前)」『史学雜誌』		
十二月			
二八年 ？月			
一月	坪井九馬三「古書古文書に見ゆる耶蘇教関係の言語」『史学雜誌』		
二月	上田万年「言語学者としての新井白石 明治二十七年十一月十一日講演」『史学雜誌』(※ただし、和蘭との関係は僅少)		
三月	上田万年「言語学者としての新井白石(承前)」『史学雜誌』 坪井九馬三「渉史満筆二則 古書古文書に見ゆる耶蘇教関係の言語／東洋旅行家めんです、ぴんと大友義鑑遭害の説」『史学雜誌』(※ただし、後者にキリシタン関係の記述なし)		
四月			
八月			
九月	齋藤阿具「長崎県下出張報告」『史学雜誌』		
一〇月	丸山正彦「平戸に於ける鄭成功 二八年九月十四日講演」『史学雜誌』		
十二月			
二九年 二月	幣原坦「南遊史話(承前)」「史学雜誌」(※沖繩について、ただし宗門改について記述あり)		
五月			
六月	ルードキツヒ、リース「和蘭国ヘーグ市ニ於ル日本歴史ニ関スル古文書」『史学雜誌』 村上直次郎「往時の西洋書中にある日本人地名の読方」『史学雑誌』	知十坊「俳諧雑記 新題目耶蘇教」『女学雑誌』 ※筆名なし「歴史上に於ける長崎港」『国民之友』 東西南北人「肥前西彼杵郡の婚姻」『風俗画報』 近藤樂石稿「基督教婚礼式」『風俗画報』(※宗門改など歴史に関する記述あり)	「大日本管轄分地図 長崎県図」 (※裏面が長崎縣総論之巡覽記)
			長崎県に最初の図書館(新橋町で長崎文庫の雛形開始、これは二六年九月の安中半三郎による発議が実現した)

七月	『雜誌』 村止直次郎「古文書古書に見ゆる欧語の出处」『史学雑誌』 水津芳徳・八木田直次郎「台湾に於て和蘭甲比丹を擒にせしは濱田彌兵衛に非ず」『史学雑誌』(※雜録)		
八月	池田晃淵「徳川家康新西班牙に通商したる情況」『史学雑誌』(※答題)		
一〇月	幸田成友「ミンステルベルヒ氏「日本の外国貿易」」『史学雑誌』		
十一月	渋江小摩策「純忠時代自天文至天正大村に於ける耶穌教及貿易」『史学雑誌』	瓊南散史「長崎方言」『風俗画報』(※「外国の言語の転訛」は省かれている)	
十二月	渋江小摩策「純忠時代自天文至天正大村に於ける耶穌教及貿易」(完)『史学雑誌』		
三〇年 二月	齋藤阿具「旧幕府時代長崎在留の蘭唐人と丸山遊女との關係」『史学雑誌』		諏訪公園の入り口に長崎市商品陳列所設置 第九回九州沖繩八果連合共進会 (一〇日、三月二一日、於諏訪公園)
三月	齋藤阿具「旧幕府時代長崎在留の蘭唐人と丸山遊女との關係」『史学雑誌』		
六月	黒板勝美「肥前国黒崎村に吉利支丹」『史学雑誌』		長崎、長与の鉄道開通
七月	村川堅固「天草耶穌会徒の遺孽」『史学雑誌』		
一〇月	Ludwing Riess 『History of the English Factory at Hirado』『TASJ』		
三一年 三月	(※「平戸に於ける英国商館の歴史」)		
一月	瀨川秀雄「日歐交通起源史を讀む」『史学雑誌』 リース「オスカー・ナコツド氏の日蘭交通史」『史学雑誌』(※雜録)		早岐、大村の鉄道開通
三月	大槻文彦「和蘭字典文典の訳述起源」『史学雑誌』		
五月	大槻文彦「和蘭字典文典の訳述起源(其二)」『史学雑誌』		
六月	大槻文彦「和蘭字典文典の訳述起源(其三)」『史学雑誌』		
一〇月		蒲原有明「南蛮鉄」『文芸倶楽部』	
十一月			長崎市の第一次市域拡張(浦上洞村は約二万二千人が編入、人口は全國第八位)
十二月			大村、長与の鉄道が開通(これ、長崎線全線が開通、山陽線、東海道線に連絡)
			『九州日の出新聞』創刊(社長ノ)

三十二年 一月	ルードキツヒ リース「平戸に於ける英国商館の歴史（明治三 一年十一月三日日本通商協成講演）」『史学雑誌』			鈴木力・神代彦次、発行所／東濱町は ひ
二月	ルードキツヒ リース「平戸に於ける英国商館の歴史（承前完 結）」『史学雑誌』			
四月	ルードキツヒ リース「葡萄牙人日本より放逐されし原因（千 六百十四年―千六百三十九年）」『史学雑誌』（※『東亜独逸自然人文 術協会報告』所収論文の、村川壺岡による翻訳） 八木奨三郎「老岐に於ける人類学上の調査」『東京人類学会雜 誌』（※肥前平戸も） 佐藤傳藏「雜報○肥前に於ける石器発見地」『東京人類学会雜 誌』			長崎市内に電話が南通
五月	ルードキツヒ リース「葡萄牙人日本より放逐せられし原因（千 六百十四年―千六百三十九年）（承前）」『史学雑誌』 坪井九馬三「長崎市西勝寺文書に見ゆる外国語解説」『史学雜 誌』			
六月	三上參次「島原城矢文並益田四郎肖像」『史学雑誌』 ルードキツヒ リース「葡萄牙人日本より放逐されし原因（千 六百十四年―千六百三十九年）（完結）」『史学雑誌』			
七月	ユスカル、ナホット「千六百十一年全十二年間西班牙使節の日 本東岸及南岸探検（明治三十二年五月二十日本会例会に於て朗読）」『史 学雑誌』（※村川壺岡訳） 坪井九馬三「葡萄牙僧日本より放逐せられし原因に就て」『史 学雑誌』			
八月	坂口昂「在支那耶穌会に関する研究の片々」『史学雑誌』（※た だし、日本との関係は記述なし）			
九月	※図版「南蛮人來朝之図」『史学雑誌』			
十月	※図版「南蛮人來朝之図（其二）」『史学雑誌』			
十一月	※図版「南蛮人來朝之図（其三）」『史学雑誌』			
三十二年 ？月	E.M.Satow 「The Jesuit Mission Press in Japan」『TASJ』（※『日本 耶穌会刊行書誌』）			
六月	河野元三「セズイト布教關係書類目録」『史学雑誌』	安閑生「肥前長崎市方言」『風俗画報』		
七月	河野元三「セズイト布教關係書類目録（承前）」『史学雑誌』			
八月	河野元三「セズイト布教關係書類目録（承前）」『史学雑誌』			

九月	河野元三「ゼズイト布教関係書類目録(承前)」「史学雑誌」 ※彙報「いたりあにて発見の伊東ドマンチヨの文書に就いて 付伊東一行記念碑の所在地」『史学雑誌』		
一〇月	坪井九馬三「羅馬府はるべりに図書館所蔵日本古文書」『史学雑誌』		
十一月	坪井九馬三「羅馬府はるべりに図書館所蔵日本古文書(其二)」 『史学雑誌』		
十二月	河野元三「ゼズイト布教関係書類目録(承前)」「史学雑誌」 坪井九馬三「大友大村有馬三家使節多ねちあ政府へ呈せし感謝 状」『史学雑誌』		
三四年 一月	坪井九馬三「羅馬府はるべりに図書館所蔵日本古文書(其三)」 『史学雑誌』		
三月	坪井九馬三「羅馬府はるべりに図書館所蔵日本古文書(其四)」 『史学雑誌』		
四月	坪井九馬三「羅馬府はるべりに図書館所蔵日本古文書(其五)」 『史学雑誌』		
五月	村上直次郎「大友大村有馬三家使節の感謝状三通」『史学雑誌』		
六月	坪井九馬三「大友大村有馬三家使節多ねちあ政府へ呈せし感謝 状」『史学雑誌』(※「ゼズイト」所収本文と、その翻訳)		
七月	山縣昌藏「南蛮寺の遺鐘」『考古界』		
一〇月	坪井九馬三「石母田文書南蛮への御案内文中に見ゆる外国語」 『史学雑誌』		
三五年 一月			
三月			
四月			

※写真挿図「長崎崇福寺」「長崎港」『風俗画報』	瀨祭書屋主人編『春夏秋冬、春 之部』(俳書堂、※「総踏」の項あり)
報」(※八月に編集所は郵船会社と交渉、堂主及び 編集員二名画家一名で横浜、神戸港、長崎、横浜 の船旅をし、「郵船図会」を特集した)	清水 亀太郎『История по Haraçaki』(著作兼発行、※ロシア 語の長崎案内)
きちかう「石の長崎」『風俗画報』	「東洋日の出新聞」創刊(社長ノ 鈴木力、発行所ノ鍛冶屋町)
上田敏「びるぜん祈祷」『こころの華』(※ ダンテの詩「Dante」の歌)	
※筆名なし「長崎繁昌策を問ふ」『東洋日の 出新聞』(※一八日)	
独学独知居士「自力宗の活学問」●京都と長崎」	
『東洋日の出新聞』(※二日)	
※筆名なし「外人と公園」『東洋日の出新聞』	

五月			(※一日) 花派生「長崎の崇福寺」『風俗画報』(※前記船旅での山本松谷子による挿画あり) ※筆名なし「乱暴工事の実際(九)」『東洋日の出新聞』(※二九日、長崎が「外国人化」したことへの批判)	
六月	ルードキツヒ リース「キリアム、アダムスと逸見に於ける彼の墳墓」『史学雑誌』(※「独逸東亜学会」所取論文の、箭内互による翻訳)		※筆名なし「櫻の港たらしめよ(遊園的長崎の経営第一著として司法の丘山墓地に櫻を植るの議)」『東洋日の出新聞』(※一六日) ※筆名なし「大公園設置の議(病院跡より招魂社迄打通して之を市有に帰せしめ以て大遊園を創れ)」『東洋日の出新聞』(※一七日) ※筆名なし「楽園の議の賛成」『東洋日の出新聞』(※二〇日) ※筆名なし「さくらなる哉」『東洋日の出新聞』(※二二日) ※筆名なし「櫻港経営の賛成投書」『東洋日の出新聞』(※二八日)	
八月				
九月	村上直次郎「しはんかす文書」『史学雑誌』			
一〇月	清水元太郎「肥前国平戸付近石世期遺跡及び遺物」『東京人類学雑誌』			
十一月				長崎瓦斯会社設立
三六年一月	春日重泰・森田實「伊達政宗之海外交通策」『史学雑誌』			
二月	春日重泰・森田實「伊達政宗之海外交通策」『史学雑誌』			
三月	村上直次郎「大友有馬大村三候の西伊遣使に関する新資料」『史学雑誌』			第五回内国勸業博覧会(一日〜七月三十一日、於大阪、※学術人類館)
四月	春日重泰・森田實「伊達政宗之海外交通策(承前)」『史学雑誌』			
	村上直次郎「大友有馬大村三候の西伊遣使に関する新資料(承前)」『史学雑誌』			
	※図版「大友大村有馬」三候使節の記念銅牌」『史学雑誌』			
六月	春日重泰・森田實「伊達政宗之海外交通策(承前)」『史学雑誌』			
七月	春日重泰・森田實「伊達政宗之海外交通策(承前)」『史学雑誌』			

八月			※筆名なし「南蛮叢話」「中央公論」(※「外国」とほぼ同義の「南蛮」を題に) 上原清影「南遊雜詩」「中央公論」(※詩のなかで「ユーギニア」を「南蛮」と表現)	十千万堂紅葉輯『俳諧新潮』(富山房、※「絵踏」の頃あり) 丁香隠士、半顔居士、東来野夫、鶴江漁史『長崎名所案内』(発行所、安中半三郎、発行所、虎興號) 長崎市役所『幕府時代の長崎』(※非売品)
九月	春旧重泰・森田實「伊達政宗之海外交通策」(承前)、『史学雑誌』 村上直次郎「ロンドン日本古文書」、『史学雑誌』(※付録) 春旧重泰・森田實「伊達政宗之海外交通策」(承前)、『史学雑誌』 村上直次郎「往時の西洋交通が国語に及ぼしたる影響」、『史学雑誌』(※付録)			
一〇月	春旧重泰・森田實「伊達政宗之海外交通策」(承前)、『史学雑誌』 村上直次郎「ロンドン日本古文書」、『史学雑誌』(※付録) 春旧重泰・森田實「伊達政宗之海外交通策」(完結)、『史学雑誌』			
十一月	春旧重泰・森田實「伊達政宗之海外交通策」(承前)、『史学雑誌』 村上直次郎「ロンドンの旧本古文書」、『史学雑誌』(※付録) 春日重泰・森田實「伊達政宗之海外交通策」(完結)、『史学雑誌』		北原白秋「恋の絵ぶみ」、『文壇』(※詩) ※筆名なし「極東時局の趨勢と長崎の大復活」(上)、『東洋日の出新聞』(※二〇日、同月二一日に「中」)、「二三日に」(下)が連載)	
十二月				
三十七年 ？月				長崎港第二次港湾改修工事(三〇年)のため出島の前面が埋築される
一月	阿部秀助「伊達政宗海外遣使の目的に関する吾人の疑問」、『史学雑誌』			日露戦争開戦
二月				
三月				
四月	山縣昌蔵「徳川時代に於ける蘭学の発展に就て」、『史学雑誌』			
五月	山縣昌蔵「徳川時代に於ける蘭学の発展に就きて」(承前)、『史学雑誌』			
六月	山縣昌蔵「徳川時代に於ける蘭学の発展に就て」(承前完結)、『史学雑誌』			
七月				
三十八年 四月				現在の長崎駅ができる(日露戦争のための鉄道路線延長により)
九月				ポーツマス条約
一〇月				
三十九年 ？月	D.C.Green 「Correspondence between William II of Holland and the Shogun of Japan, A.D.1844」、『TASJ』(※「オランダのウィルヘルム			

三月	<p>「二世と將軍の文通」(八四四年)、「<u>倭国</u>」(南蛮賦について)、『史学雜誌』</p>	<p>蒲原有明「<u>苦惱</u>」「<u>太陽</u>」(※詩)          ※筆名なし「愛国的基督教村1」『東洋日の          出新聞』(※二四日、同月二五日に「2」、二六          日に「3」が連載)          ※筆名なし「国旗なき村とは」(浦上山里対某          新聞)『東洋日の出新聞』(※二七日、同月二          八日に「2」、二九日に「3」、三一日に「          4」が連載)          ※筆名なし「国旗なき村とは」(浦上山里対          某新聞)『東洋日の出新聞』(※一日、同月二          日に「6」、三日に「7」が連載)          柿園／演・巴人亭／記「<u>天草一揆</u>」『東          京日々新聞』(※六月一日〜一月二日の朝          刊に連載)          北原白秋「<u>解纜</u>」「<u>明星</u>」(※詩)</p>	<p>東京帝室博物館『嘉永以前西洋          輸入品及参考品目録』          主幹喜多直一『長崎あんない』(発          行者／富松繁治)</p>
四月			
六月			
八月			
九月			
一〇月			
十一月			
十二月			
四〇年 一月	<p>ITM生「南蛮寺鐘の類品」、『考古界』          村上直次郎「国語中の外来語」、『語学』          村上直次郎「国語中の外来語(前号のつゞき)」、『語学』</p>	<p>上田敏「<u>踏絵</u>」『あやめ会詩集第二 豊旗雲』          (※詩)          カステーラ本論白水喜八「名譽カステーラ広          告」『東洋日の出新聞』(※一日カステラを「南          洋人の直伝」と表現)</p>	<p>塚原洪柿園『天草一揆前編』(今          古堂書店)          藤沢古雪『がらしあ』(大日本図          書会社)          塚原洪柿園『天草一揆後編』(今          古堂書店)          河東碧梧桐選『続春夏秋冬          之部』(俳書堂、※「<u>絵踏</u>」の項あり)</p>
二月			
四月			
五月			
八月			

九月		<p>新聞』(※紀行文、以下同月の連載分で該当するものは、「五足の靴(十) 荒れの日」、「五足の靴(十一) 蛇と墓」、「五足の靴(十二) 大失敗」、「五足の靴(十三) 大江村」、「五足の靴(十四) 海の上」、「五足の靴(十五) 宿馬城趾」)</p> <p>山城正忠「礼知らず南蛮の子は帝ます都に入らぬ黒き顔して」『明星』(※短歌)</p> <p>五人づれ「五足の靴(二十七) 京の朝」『東京二六新聞』</p>	<p>蘆塚十三郎『長崎案内』(著作兼発行)</p> <p>長崎市の西濱町に漆勅写真電気館設置</p>
----	--	--	--

【主な参考文献】

長崎市小学校職員会『明治維新以後の長崎』(著作兼発行、大正一四年一月)

長崎県『長崎県史 近代編』(吉川弘文館、昭和五一年三月)

新村出『薩道先生景仰録』(くろりあそさえて、昭和四年一月)

ダグラス・M・ケンリック『日本アジア協会一〇〇年史―日本における日本研究の誕生と発展―』(一九七八／池田雅夫訳、市民文化研究センター編、横浜市立大学経済研究所、平成六年一月)

【付記】

文献・資料の名称及び引用文において、旧漢字はできる限り改めた。  
なお本稿は、平成一四年度科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究結果の一部である。

(はたなか よしえ・日本学術振興会特別研究員)